

福島第1

3期40年廃炉工程表決定

作業と並行技術開発

東京電力福島第1原発・東電中長期対策会議は1〜4号機の廃炉に向けては21日、施設解体終了までを最長40年とし、3期

に分けた中長期の工程表を決めた。

(4面に関連記事)

原子炉で溶けた燃料を取り出すため、原子炉格納容器を補修しながら水張りを進めるなど、技術開発と同時並行で廃炉作業を進める手順を盛り込

み、高い放射線量の中で作業するロボット開発などを進める研究開発推進本部を設置した。工程表は、汚染水処理や海洋汚染防止、放射性廃棄物の管理や処分、施設解体など多くの課題を挙げ、困難な道のりをう

福島第1原発事故の廃炉に向けた工程表

| | 2年以内 | 10年以内 | 30~40年 |
|----------------|-------------|-------|----------------|
| 1~3号機原子炉 | 溶融燃料の取り出し着手 | | 施設の解体撤去(廃炉の終了) |
| 1~4号機使用済み燃料プール | 燃料取り出し着手 | | |

格納容器に光ファイバー装置を入れ、水位や温度を直接確認する。汚染水処理では、ストロンチウムなど現在除去できない放射性物質を取り除く新設備を来年中に導入。浄化した汚染水を原子炉に注水するシステムは、敷地内に張り巡らせた約4キロの配管を短縮。1基ごとに原子炉建屋で水の浄化と冷却を完結させるよう目指す。汚染水の海洋流出を防ぐ遮

かがわせる内容。少なくとも年に1回は工程表を見直すとしている。第1期は使用済み燃料プールから燃料取り出しを始める2年後まで、第2期は溶けた燃料の取り出しを始める10年後まで、第3期は建屋解体が終了する30〜40年後まで。

溶けた燃料関連では、2年以内にロボットによる建屋内の除染技術を確認。格納容器の損傷箇所を調査・補修する装置を開発し、水漏れを止め、格納容器下部に水を張る。20〜25年後に取り出しを終える。「冷温停止状態」の継続監視のため、

水壁は14年度半ばに完成。汚染水の海への安易な放出はせず、10年以内に汚染水処理完了を目指す。作業員は、1人当たりの年間被ばく線量を20ミリシーベルト以下とすると、最大で年間約1万2千人必要(12年)だが、人員不足による作業への支障はないとした。